

第52回「はちしん灌花塾」開催

8月1日（土）第52回「はちしん灌花塾」が八幡信用金庫本部3階会議室において開催されました。

郡上市歴史資料館主任／学芸員 安江^{のりひろ}範泰氏をお招きして「ふすまをはがして発見！知られざる郡上史」と題して講義いただき、当日は当金庫の役職員や一般参加の方30名が受講しました。



<郡上市歴史資料館の取り組み>

郡上市歴史資料館は、郡上に関する歴史資料を収集・保管しており、学芸員はその資料を解説・整理し、その成果を広く公開している。

2020年から「襖^{ふすま}の下張り文書はがし講座」として、襖の解体と古文書の解説講座を行っており、今日はその成果を基に話をする。

<襖の構造と下張り文章の取り扱い>

襖は木製の「下地骨^{したじほね}」の上に、役割の異なる複数の紙層^{紙層}（骨^{ほね}縛り、銅^{どう}張り等）を重ねて作られている。この紙層には反故紙^{はんこし}が再利用され、これを「下張り文書」と言い、襖の中に過去の文書が意図なく保存されることになった。

下張り文書の解体・保存の手順は、①写真撮影とスケッチで解体前の状態を記録する。②下張り文書1枚ごとに、どこにあったかを示すラベルを貼る。③竹べらで剥がしていく。④剥がした文書を乾燥、修復、補強し、1枚ずつ写真撮影後、目録に記録し、最後に層ごとに封筒に入れ収納する。

<下張り文書から読み解く郡上の歴史（江戸時代）>

郡上藩士の日常に関する幕末（1850年代）の足軽格の年賀状と、藩主の世継ぎ誕生を祝う書状（年代不詳）が出てきた。

天保14（1843）年の田辺という藩士の書状には、「3人のうち私が1番下戸だ」「こちらには大酒飲みがいる」などと書かれており、これは越前領地にいる藩士から、郡上藩士2名に宛てた書状と考えられ、藩士同士の気軽なやり取りがあったことがわかる。

その他には、商人の山田屋十兵衛が、藩の役人（安藤氏と江村氏）に、くじ本村の米5俵を「御継米に下さるべく」との願書がある。この他にも両役人に宛てた書状は多くあり、両者のいずれかが保管していた文書をまとめて破棄したものと推測できる。

村民の暮らしとして、門手村^{かどて}（藩領）と西乙原村（旗本領）の村境の論争に役人が現地

踏査に来ることとなり、役人の宿を両村の話し合いで決めた書状が出てきた。ここから所管の異なる村境の裁定は、幕府の代官が行っていたと考えられる。

安政7（1856）年に福手村（相生）の百姓2人が獣害対策で鉄砲所持を届け出る書状があり、鉄砲所持が厳格に管理されていたことがわかる。

その他には、文化2（1805）年に婚姻により市島村から川佐村へ移るトネ（25歳）の宗門人別帳（戸籍台帳）への記載を依頼したものや、百姓たちの食糧不足に対する、食糧費の借り受け金の出願書が出てきた。

<下張り文書から読み解く郡上の歴史（明治・大正時代）>

大正期の交通状況について、八幡から美濃までの乗合自動車運賃は6円40銭、美濃から岐阜までは路面電車、岐阜から名古屋までは汽車を利用したとする移動記録が出てきた。

大正12（1923）年の八幡町内の領収書からは、葬式用の「葬具、位牌、花桶」を購入し、前日には大間見屋支店で砂糖を30袋購入したこと、「ナイスモス」という上等な布を「大マケ」してもらい、1円5銭で購入した様子が見えてくる。

<明治時代の長龍寺>

白鳥町前谷竹下家の襖からは、明治21（1888）年に関市の善光寺が、長龍寺の「宝物」を管内に迎え入れる「開扉御願^{かいひ}」を出し、武儀郡長からの許可書がでてきており、拝観料が寺運営資金となっていたと推測できる。

明治23（1890）年の文書に、比叡山延暦寺の大営繕の拠出金として長龍寺が2円を拠出予定とあり、長龍寺が延暦寺を支えるネットワークに組み込まれていたことがわかる。

明治32（1899）年4月の長龍寺伽藍焼失直後、谷汲山華嚴寺から、火災に関する報告書の提出指示があり、翌年には内務大臣の許可を得て、岐阜、福井で寄付金の募集を開始したこと、日露戦争で募集が中断したこと、資材が高騰したこと、募金が難航したこと、予算総額は29,359円で本殿は18,111円と算定されたことがわかった。長龍寺は、こうした困難を経て大正6（1917）年に再興された。

<まとめ>

最後に先生は、「襖とは、捨てられた古文書を再利用しパッケージして今日まで伝える、いわば『タイムカプセル』である。下張り文書からは、知られざる地域の歴史に出会えることがあり、貴重な地域史料になりうる。古くなった襖があれば、捨てる前に歴史資料館に相談してほしい。」と締めくくられました。

